

平成二十六年 度

和歌山信愛中学校

入学試験 前期日程

国語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～21ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

（解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。）

受験番号

--

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の――線部①～④の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、――線部⑤～⑩のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 万一に備える。
- ② 快い音楽の調べ。
- ③ 穀物の価格が上がる。
- ④ 寒暖の差が激しい。
- ⑤ 父がつとめている会社。
- ⑥ 運動会が雨で明日にのびる。
- ⑦ 決勝戦でライバルにやぶれる。
- ⑧ ピアノのえんそうを聞く。
- ⑨ よくじつは文化祭だ。
- ⑩ とても親こうような人だ。

問二 次の①～⑥の——線部はそれぞれどこに直接かかっていますか。記号で答えなさい。

- ① だれかが 大声で ^ア ぼくの ^イ 名前を ^ウ 呼んだ。
② 兄は ^ア スポーツの ^イ 中では ^ウ バスケットボールが ^エ 得意だ。
③ 小さな ^ア 白い ^イ 犬が ^ウ 道に ^エ 飛び出した。
④ 明日 ^ア 町へ ^イ 母と ^ウ 買い物に ^エ 行く。
⑤ たとえ ^ア 走つても ^イ 予定の ^ウ 電車には ^エ 間に合わない。
⑥ 机の ^ア 上の ^イ あの ^ウ 本は ^エ 私の ^オ 教科書です。

問三 次の①～⑤の三字熟語と同じ構成の熟語を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

- ① 別世界 ② 不公平 ③ 積極的 ④ 発表会 ⑤ 市町村

ア 松竹梅 イ 観察力 ウ 無重力 エ 新時代 オ 機械化

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ 空気の中には、実は気体以外にエアロゾルと呼ばれている小さな粒子がたくさん浮遊している。そして、これらのエアロゾルが存在することで、^①空気が空気らしくなっている。

「空気が空気らしい」という感覚を説明せよと言われると、少しやっかいだが、説明を試みてみよう。

たとえば、海岸に行けばどこからともなく磯の香りがする。遠くを眺めると、景色が何だかぼんやりして見えることがある。雲が湧いてくれば、やがて雨が降ってくるように思う。あるいは工事現場を通りかかるとなんだかほこりっぽくて鼻がむずむずする。近くにある工場の煙突から煙がもくもく出てくるのを見ているうちに、くしゃみが出てきた。このように、いろいろな場面で経験する現象を通して、「空気らしさ」というものを感じることができる。

このエアロゾルと総称されている中に、大気汚染物質の代表格の硫酸ミストもあれば、黄砂も含まれている。そして、微生物も含まれているのである。

X 大気中から採集した微生物の中には、何という名前の細菌なのか全く分からなかったり、A 名前は分かったものの、地球上でどんな働きをしているのか不明だったりするものも少なくない。B、そのような菌が「人間にとって良いのか悪いのか」ということが分かるはずもない。

それにもかかわらず私たち人間は、いつの頃からか、^②空気に対して恐ろしく単純なイメージを持たされてしまっている。

「空気は気体でできている」

「空気の主要な組成は酸素と窒素のガスである」

「わずかに水と二酸化炭素が混じっている」

などに代表される空気のイメージである。

空気については小学校や中学校で勉強するので、私たちの持つ感覚は、学校教育の賜^{たまもの}なのであろう。この感覚は、一言で言うてしまえば、きわめて無機的である。

そのような感覚を持った人が、大気中に多種多様な微生物（もちろん目に見えないものが大多数）が浮遊していると聞かされると、たいてい「何か不気味で怖いね」と言う。確かに、目に見えないくせに何かが存在しているという状態は人を不安に陥^{おとし}れる。

C、人は「目に見えない状態とは、何事も起きない状態」であってほしいと願っている存在だからである。

まして、空気中に浮^うかんでいるものが細菌などであると聞かされれば、即座^{そく}に「病原性のなんとか菌」を思い出してしまい、ますます不安になってくる。

II 私たちの空気を見る目（空気に対する感覚といってもよいが）は、きわめて無機的である。これほど生き物と深い関係がある存在であるのに、空気を形容する言葉は、「からつとした空気」「ひんやりとした空気」「冷たい空気」「生暖かい空気」など、ひどく無機的な感じがする。《1》

空調機の調整メモリーも、「温度」「風向」「風量」「加湿^し」などひどく味気ない。通常、この空気をあたかも微生物がたくさん浮遊している海のように想像する人は少ないのであろう。であるから、そのような状態になったら（現実にはそれに近いような気もするのだが）、きわめて大変な事態だと考えてしまうのかもしれない。《2》

長年黄砂を研究してきて、この頃私が感じるのは、「空気を利用して生きているのは人間だけではない。目に見える生き物、そして目に見えない生き物も全^{すべ}て何らかの形で空気を利用して生きている」ということである。とりわけ、目に見えない微生物は、目に見えないだけにどんな利用の仕方をし、どんなときに人間と衝突^{しょうとつ}したり競合したりする（こんなときには、人間に対してよからぬことが起きるのであろうが）のかが分かりにくい。分かりにくいだけに、興味も湧くということだ。《3》

地球の空気が今のように酸素が二〇パーセント近くも占^しめていような状態になっているのは、微生物の営々とした働きによる

ものだ。微生物は、人間が地球上に登場するよりもはるか以前から地球上にいたのである。《4》

そうすると、生命史の上では人間の先輩である微生物の先祖が空气中を盛んに行ったり来たりしていたところに人類が登場したということが想像できる。人類は進化の過程で^③微生物たちとのつきあい方を学習していったのではないだろうか。《5》

人間の大腸には無数の微生物が住んでいる。これらの菌は、人類の先祖に当たる類人猿がこの世に登場した頃から彼らの大腸に住みついて、共生関係を作っていたに違いない。いや、類人猿の大先祖である哺乳類がこの世に登場した頃から、その共生関係が成立していたのではないだろうか。

そのように考えると、大腸に住む微生物たちと我々人間は、ともに生きともに死ぬより他はないのであり、たがいに分かち難い関係にあるのである。

また、空気中の微生物と人間の関係にもこれと似たようなものがたくさんある。先日、私が金沢市内を観光していた時のことである。街道筋にあった酒屋の玄関先に「酒蔵見学できます」の看板を見つけ、見学させてもらうことにした。すると、見学の初めに「^④お履き物を替えていただきたいのですが」と言われ、店が用意した履き物に履き替えた。ところが、その履き物がきれいかという、そうでもない。軽快に歩けるような運動機能の高いものかという、そうでもない。デザインがその酒屋の宣伝によるしいようなものかという、そうでもない。

大事なのは、長くその蔵で使われていたという点にあった。その蔵に住み着いている[※]麹菌などの微生物がその履き物にもついているだろうし、その履き物にくっついていて土の汚れ一つとっても、それらの微生物にはおなじみのものである。

つまり、ここでは、微生物がせつせと活動して作りあげた環境が、外からの新たな菌やカビなどの微生物によって破壊されないように人間が守り、そのかわりに、人間は「酒」という恵みを受けるという関係が形成されているのである。私たち人間は、空气中に見えない微生物や細菌が浮遊しているなどと聞くと、すぐに不安を抱いてしまうが、実は微生物からの恩恵も少なからず受けているのである。

さらに、よく考えてみると、空気中に浮遊している微生物は、ときには私たちの皮膚にとりついたり、呼吸を通して気管の壁面にとりついたりしている可能性が高い。また、食べ物や飲み水を通して体内に入ってきたりすることもあるだろう。とすると、生まれてこの方、私たちは絶えず大気中に浮遊している微生物を体に入れて来たということになる。

ここで柿川真紀子さんが中心になって進めてきた研究の結果を紹介しよう。「正体が判明した空気中の微生物のほとんどが『何をしているのか分からない』グループである」というものだ。

今では私も彼女の報告を聞くことに慣れたが、初めの頃は「そいつは空気中で何をしている菌なのですか?」「何かの役に立っているのではないですか?」と、やたら質問していた。

何事もしていない存在というのが不思議というか、腑に落ちなかったのであるが、考えてみれば^⑤これはまさしく人間の自分勝手な質問であり、人間にとって良いものと悪いものに性急に分けたがっている姿が見え見えである。

世の中そんな単純なものではないよ、と分かっているが、目に見えないものが相手になると、ついついアプローチが単純になってしまう。

そして、何をしているのか分からない連中が圧倒的に多いからこそ、人間は口や鼻、さらには皮膚を通して空気中の微生物が体内に入ってきていても、何事も感じず、何事も起きない生活が送れているということなのだろう。

ただ、他の動物や植物にとってどういうことになるのかは全く分からない。やみくもに不安がったり恐れたりせず、本当のところはどうなっているのかと考えること、これが必要だろう。

このことが分かれば、空気という空間を人間はもちろんだが、目に見えない生物たちがどんなふうにご利用し、互いに関係しあっているか、見えてくるだろう。大気圏という「公共広場」とでも言えばよい。空中を浮遊する微生物と人間は様々な関係の網で結ばれているのである。

(岩坂 泰信『空飛ぶ納豆菌』より)

注 ※ 麹菌^{こうじ}：酒・みそ・しょうゆなどの製造に利用される菌。

問一 ——— 線部①「空気が空気らしく」とありますが、人間がそのように感じる時として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 空気中にエアロゾルを見つけた時。
- イ 学習で空気に関する知識を得た時。
- ウ 空気中存在する何かを五感でとらえた時。
- エ 呼吸によって空気のありがたさを実感した時。
- オ 空気中存在する微生物の働きが解明された時。

問二

A

C

 に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ところで
- イ なぜなら
- ウ あるいは
- エ むしろ
- オ ましてや

問三 ——— 線部②「空気に対して恐ろしく単純なイメージを持たされてしまっている」について

- (1) 人間が持つそのようなイメージは何によって作られたものだと筆者は考えていますか。本文中から四字でぬき出して答えなさい。

- (2) また、そのイメージとはどのようなものだと筆者は考えていますか。「うなイメージ」につながるように本文中から七字でぬき出して答えなさい。

問四 ——— 線部③「微生物たちとのつきあい方を学習していった」とありますが、その結果人間と微生物はどのようなかわりを持つようになったのですか。本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問五 本文中から次の一文がぬけ落ちています。どこに入れるのが適当ですか。本文中の《1》《5》から選び、記号で答えなさい。

彼らは空気を利用することにおいては、人類よりも長い経験を積んでいるはずなのである。

問六 ——— 線部④ 「お履き物を替えていただきたいのですが」とありますが、「履き物」を履き替えるのは何のためですか。本文中の言葉を使って六十字以内で説明しなさい。

問七 ——— 線部⑤ 「これはまさしく人間の自分勝手な質問」とありますが、この質問がどのような点で「自分勝手」と言えるのですか。解答らの形に合うように四十字以内で説明しなさい。

問八 ~~~~~ 線部X 「大気中から採集した微生物」とありますが、それらと接する際に筆者が大切だと考えていることはどのようなことですか。本文のⅡの部分から四十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「今日も、……おじいさん来てるのか？」

受付の小窓から待合室を覗いて、江田先生が聞くと、二人の若い看護婦が同時にうなずいた。

「待っているんでしょうか？ 呼ばれるのを？」

「だって、診察券は出してませんよ。……治療が終わったのは知ってるはずですよ」

「いったい、どういふつもりなんだろう？」

江田先生と看護婦たちは、待合室の隅のベンチで背を丸めている山崎さんを眺めた。

江田医院は、駅前商店街のはずれにある小さな個人病院である。内科が専門だが、外科もたいていのことなら診ている。

全体の患者数はけっして多くはないが、そのこぢんまりした待合室には、いつも通院患者が三、四人いる。――風邪をひいた主

婦や怪我した子供を連れた母親、高血圧や心臓病のお年寄りたち。ほとんどが近所の人で、知り合いが顔を合わせると、待合室は

お互いを慰め合う社交場になる。

江田先生は五十代後半で、大きな恰幅の持ち主である。二人の看護婦が受付やカルテの準備、患者のお世話、注射、薬の受け渡し、会計などと、こまねずみのように動きまわるなかで、^①白衣の先生はどつしりと肘かけ椅子におさまっている。

江田医院が近所の人たちに評判がいいのは、先生が診察をけっして急がないからである。

一人一人の患者とゆっくり話をする。患者のいいたいことに、しっかり耳を傾ける。嚙んで含めるように、病状や治療法を説明する。――だから、待合室で待っている時間は当然長くなるが、誰も不平をいう者はいない。

山崎さんは、ベンチの端に腰掛けています。小柄な体を縮こませ、背中をまるめてうずくまっています。禿げ上がった頭を、右肩の方へわずかに傾けて、目をつむっている。冷房のほどよくきいたなかで、居眠りしているようにも見えます。

「先生、どうしたらいいでしょう？」^② このままじゃ、ほかの患者さんの手前もありますし……」

「家族の方に電話したほうがいいんじゃないでしょうか？ ……山崎さんが通院しなくてよくなったのを、家族は知らないのかも
しれません」

看護婦たちは、いまにも電話をかける気配を見せた。江田先生は、まあ待て、と手を振った。

カルテには、山崎さんの職業は植木職と記載してある。

二か月前、仕事中に右肩を強く打って、江田医院に担ぎ込まれた。骨に異常はないが、筋を傷めていて、右腕が上がらなくなつた。それを、七十三歳の年齢にしては根気よく毎日通院して、なんとか回復したのが一週間前である。

あとは自宅で塗布剤をつづけていればよい、ということで通院の必要はなくなった。

ところが、山崎さんは、それから毎日欠かさず通ってくるのだ。看護婦が、

「もう治療は終わったんですよ」

と何度いい聞かせても効果はなかった。毎朝八時半になると、待合室に姿を見せるのである。

そして、午前中いっぱいベンチにいて、お昼すぎにようやく腰を上げる。

その間、通院患者の中には、山崎さんを気味悪そうに横目で見る者もいる。診察室から呼ばれることのない老人が、いつもベンチにいるのだから、不審に思うのも無理はない。

山崎さんは、待合室のほかの人たちと口をきくわけではなく、目を見合わせるわけでもなく、ただじっとうずくまっているだけなのである。

「もしかすると、何か目的があるんじゃないだろうか。……たとえば、通院中に知り合った患者さんがいて、その人に会うためとか」

江田先生の推理に看護婦たちは目をまるくした。いままで思ってもみなかったことだ。

「待合室で親しくなった人がいるなんて、考えられません。……山崎さんが、誰かと口をきいたことなんてあったかしら」

「そうよね。……わたしなんか、^b偏屈^{へんくつ}なおじいさんだなんて、いつも思っていましたもの」

そういえば、山崎さんのむつつりだんまりで、江田先生も問診にてこずった覚えがある。

やがて診察時間になったので、江田先生は肘かけ椅子に大きな腰をどっかとおろした。

いつもの通りの念入りな診察が、ゆつくりと行われて、午前中の診察が一段落したとき、

「……やっぱ^③り先生の推理どおりみたいです」

看護婦が二人で来て、そつといった。

「ずっと観察してましたら、山崎さんの目がときどき薄く開くんです。……それが、玄関^{げん}に患者さんが見えたときなんです」

「やっぱり誰かを待っているんです、先生」

江田先生は、満足げに微笑^{ほほえ}みながらうなずいた。

「おじいさん、まだいるのかい？」

「ええ、たいてい十二時すぎまでいますから」

「じゃあ、ここに呼んでみてくれないか」

④ 山崎さんが、不安そうな表情で診察室に入ってきた。顔面に彫^ほり込まれた深い皺^{しわ}の間に、頑固^{がん}そうな小さな目とへの字に結ん

だ唇^{くちびる}が見えた。

「まあ、お掛けなさい。……腕の状態は、どうですか。もう痛まないでしよう？」

江田先生が、いつものように大きな体を肘かけ椅子に預けたまま話しかけた。山崎さんは、小柄な体をさらに小さく縮めるようにして、うなずいた。

「待っている人に、なかなか会えないようですね。……どなたを待っているんです？」

いきなり、ずばりと聞いた。山崎さんは、まるで悪事を咎められたように体をこわばらせた。

「分かんねえんです。……それが」

「分からないって、どういうことなの？」

看護婦が、横あいから口を出した。それを押しとどめて、江田先生が優しくいった。

「話してごらんないな。……力になれるかもしれないから。どうです？」

すると、山崎さんは薄手のジャンパーのポケットから煙草の箱のようなものを取り出した。

「約束したんです。こいつをやるって……」

山崎さんが箱を開けると、つややかに黒光りする生き物が、^{はさみ}鋏状の頭部を覗かせた。

看護婦たちが、おおげさに悲鳴を上げて飛びのいた。

「ほう。……これは、みごとなクワガタだ」

江田先生は、たくましい胴体を巧みにつまみ上げた。クワガタムシは、足を激しく動かした。

山崎さんが、^⑤重い口で少しづつ話したところによると、このクワガタムシは一人の男の子のために採ってきたのだという。

一か月と少し前、山崎さんは待合室で、五歳ぐらいの男の子と出会った。——初めは言葉を交わさなかったが、二度目に会ったとき、男の子は一冊の本を抱えて山崎さんのそばに寄ってきた。

「おじいちゃん、この虫、知ってる？」

本にカラー写真が載っていて、それがクワガタムシだったのだそうだ。

「ああ。……こいつなら、うちの裏の林にいっぱい出てくるよ。もっと大きなやつがね」

「ねえ、生きてるやつ？ ぼく、ほしいなあ」

「いまは、まだ出てこないがね、あと一か月もすれば捕まえられるさ」

山崎さんは、珍しく口が滑らになつたらしい。相手が幼い子供なので、むつつり顔で黙っているわけにはいかなかったのかもしれない。

「じゃ、出てきたら、捕まえてね。約束して」

「ああ、いいとも。……ひと月したら、きつと持ってきてやる。約束するよ」

たつたそれだけのことだった。どこの子か知らないし、なんという名前なのかも知らない。青白い顔をした弱々しい男の子が、急に瞳を輝かせて、その頬をいつとき上気させたのが印象的だったそうだ。

まもなく母親らしい女性が診察室から出てきて、そそくさと男の子を連れて帰っていった。男の子は靴をはきながら、大声で山崎さんにいった。

「きつとだよ。……忘れないでね」

怪訝そうに振り向いた。⑥ 母親の目が涙でうるんでいるのを、山崎さんは目ざとく認めた。そのためかどうか、山崎さんは男の子のことが忘れられなくなっていた。——しかし、男の子とはそれ以来、一度も会うことがなかった。

「なるほど、そうでしたか。……約束の一个月が経つても、その子は現れないんですね？」

江田先生が聞くと、山崎さんは恥ずかしそうに下を向いた。そして、低い声で呟いた。

「毎朝、生きのいいクワガタを捕まえてきてたんだが。……子供のことだから、あるいは本人のほうで忘れてしまったのかもしれないね」

看護婦たちが、そばで溜め息混じりにいった。

「そうよね。……そんな小さな子が一か月前の約束を覚えてるわけないもんねえ」

「山崎さんて、いいところあるのねえ、見直しちゃった。……ほんとは、すごく優しいんだ」
すると、山崎さんは顔を赤らめ、すぐに眉根を寄せて難しい表情をつくった。

「そうじゃねえ。……約束は約束だからだ」

江田先生は微笑んで、看護婦に告げた。

「カルテをチェックしてくれ。……一か月前に二度来院して、それ以後来ない患者さんだ」

「はい、すぐに調べます」

看護婦たちは、受付の棚へ飛んでいった。

「誰かが分かったら、わたしから先方に電話してあげますよ。……せっかくの山崎さんの好意なんだから、クワガタをいただきに来なさいってね」

山崎さんは難しい表情を和らげて、大きな机の上を歩き回るクワガタムシを、江田先生と一緒に楽しそうに眺めた。

「先生、ちよつといらしてみてください」

看護婦の一人が、カルテを手にして呼んだ。さりげない声だが、緊張しているのが分かった。

「どうした。……あつたのかね」

江田先生は、大きな体を肘かけ椅子から重たそうに持ち上げて、ゆつたりと受付へ向かった。

「その男の子、例の子じゃないでしょうか？」

しばらく、密やかに話し合う声がつづいてから、江田先生が椅子に戻ってきた。

「分かりましたよ。……私の知人の息子でした。あの後、私が紹介した大病院に通院することになりましたね」

「ああ。……それじゃ会えねえのが当たり前だ。それで、どこが悪いんで？」

「ええまあ、心臓の病気です。……いずれ手術すれば、すぐに元気になるでしょう」

「それならよかった。……ところで、このクワガタを渡すことはできるかね？」

江田先生は、しばらく考えてから、うなずいた。

「渡せますとも。……私が、今夜にでも届けてきてあげましょう」

「そうかね、お願いできるかね？」

「なに、クルマで行けばすぐのところだから。あの子も、きっと大喜びしますよ。山崎さんのことを、ちゃんと伝えておきますからね」

山崎さんは、嬉し^{うれ}そうにうなずいた。クワガタムシを江田先生に預け、何度も頭を下げて帰っていった。いつもの山崎さんのむつり顔は消えて、いかにも満足^{すがすが}そうな清々しい表情をしていた。

その後ろ姿が待合室から見えなくなるのを待ちかまえたように、二人の看護婦が同時にいった。

「先生。だって、あの子はもう……」

「そうさ。もう二週間も前に、大学病院で、手術の痛みもなく亡^なくなってしまった」

「それなのに、どうして山崎さんとあんな約束^⑦をなさったんですか？」

江田先生は、大きな体を肘かけ椅子に沈^{しず}めた。

「あの子の代わりに約束を果たすためだよ。山崎さんが楽しみにしていた約束をね」

素晴らしいながら、遠くを見る目をした。

「あの子が瞳を輝かせ、青白い顔を上気させて大喜びする顔が、山崎さんの楽しみだったんだ。……さっきの山崎さんの様子を見れば、^⑧その約束は充分に果たせたと思うがね」

問一 〜〜線部 a 「噛んで含める」、b 「偏屈な」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「噛んで含める」

- ア 丁寧^{ていねい}に説明する様子
イ そっけなく言う様子
ウ 悔^{くや}しいのを我慢^{がまん}する様子
エ 一生懸命^{けんけん}取り組む様子

b 「偏屈な」

- ア 意地悪で思いやりがない
イ 物静かで無口な
ウ 口やかましく怒^{おこ}りっぽい
エ かたくなで素直^{すなお}でない

問二 線部①「白衣の先生はどつしりと肘かけ椅子におさまっている」から読み取れる江田先生の様子について最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 誠実な姿勢でじつくりと診察する様子を示している。
イ 仕事へのやる気に満ちあふれる様子を示している。
ウ とても太っていて動きにくい様子を示している。
エ 医者らしく偉^{えら}そうに振舞^ふっている様子を示している。
オ 診断に自信がないのをごまかそうとする様子を示している。

問三

——線部②「このままじゃ、ほかの患者さんの手前もありますし……」とありますが、看護婦が心配している内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 診察も受けない山崎さんが待合室にすることで、ベンチに座れない患者さんがでてしまうこと。
- イ 診察も受けない山崎さんが待合室にすることで、自分の順番が遅くなると思う患者さんがでてしまうこと。
- ウ 診察も受けない山崎さんが待合室にすることで、薄気味悪く思ってしまう患者さんがでてしまうこと。
- エ 診察を受けるために待っている患者さんが待合室にすることで、山崎さんがよく眠れないこと。
- オ 診察を受けるために待っている患者さんが待合室にすることで、山崎さんの機嫌が悪くなるということ。

問四

——線部③「先生の推理どおりみたいです」について

- (1) 「先生の推理」とはどのようなのですか。「」ではないかという推理」に続くように本文中から二十五字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

- (2) そう看護婦たちが確信したのはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線部④「山崎さんが、不安そうな表情で診察室に入ってきた」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 看護婦に他の人の様子をうかがっていることを見抜かれ、恥ずかしく思ったから。
イ 診察を受けるわけでもないのに待合室にいることについて注意されと思ったから。
ウ 毎日冷房がきいた待合室で涼しい思いをしていることを責められると思ったから。
エ 江田先生に診察代を払えないと誤解させてしまったのではないかと思ったから。
オ 右肩に塗るべき薬をちゃんと塗っていないことを怒られると思ったから。

問六 —— 線部⑤「重い口で少しずつ話した」とありますが、山崎さんの話はどこまで続いていますか。その最後の五字をぬき出しなさい。ただし、句読点も一字分と数えること。

問七 ——— 線部⑥「母親の目が涙でうるんでいる」とありますが、その理由として最も適当だと考えられるものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

ア 江田先生にじっくりと診察をしてもらい、とても感謝をしていたから。

イ 見たことのない老人と楽しそうに話すという行動から子供の成長を感じたから。

ウ 子供が長く患^{わづら}っていた病気が手術で完治すると聞き、希望を持ったから。

エ 知らない老人が自分の子供に危害を加えるのではと心配になったから。

オ 診察の結果が思わしいものではなく、不安でいっぱいになっていたから。

問八 ——— 線部⑦「あんな約束」とは、どのような「約束」ですか。説明しなさい。

問九 ——— 線部⑧「その約束は充分に果たせたと思うがね」とありますが、江田先生がそのように判断した理由を、「くから」
につながるように本文中から四十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問十 この文章の表現に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 会話中に「……」を多くはさみこむことで、その場の気まずい雰囲気^{ふん}が効果的に伝わるように工夫^{くふう}されている。
- イ 比喩^ゆや体言止めなどの表現技法を多用することで、物語全体が詩的に感じられるように工夫されている。
- ウ 山崎さんの視点を通してできごとが語られることで、読者が感情移入しやすいように工夫されている。
- エ 過去の出来事も会話を交えて描く^{えが}ことで、現在と過去とが入り交じった非日常性が伝わるように工夫されている。
- オ 連続する会話において登場人物の口調に特徴^{ちよう}を持たせることで、人柄^{がら}の違いが際立^{きわ}つように工夫されている。

(読み各1点・書き各2点)

(各1点)

(各1点)

(各2点)

なイメージ。
(3点)

(4点)

(5点)

(4点)

で自分勝手と言える。

(4点)

(3)

(3)

(4点)

(3)

(54)

(4点)

平成二十六年 度

和歌山信愛中学校

入学試験 中期日程

国 語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～20ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を
開いたまま裏返しておきなさい。
- 三

（解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。）

受験番号

--

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 ――― 線部①～④の漢字の読みをひらがなで答えなさい。 また ――― 線部⑤～⑧のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 臨場感のある映像。
- ② 返事を保留する。
- ③ 山の頂に立つ。
- ④ 手本を模写する。
- ⑤ バスのうんちんが上がる。
- ⑥ ちょうへん小説を読む。
- ⑦ 先生の作品をはいけんする。
- ⑧ ゴミをひろう。

問二 次の①～③のひらがなを漢字に直しなさい。また、その意味を後のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① ごんごどうだん ② せいこううどく ③ むがむちゅう

ア 種類や違いがさまざまであること。
イ あるものごとに熱中すること。
ウ もつてのほかであること。
エ 思いのままに暮らすこと。

問三 次の文が正しい表現になるように――線部を言い換えなさい。

- ① 両親の願いは、私が中学校に合格することを願っている。
② 森には、大洪水を防ぐ役割である。
③ 妹は、テニスのルールを友人から教えてあげた。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①現代技術^{ちやう}を特徴^{ちやう}づけるのは豊富な工業製品の氾濫^{はんらん}であろう。少なくとも先進工業国においては、高い生産性に裏づけられた安価で高品質の工業製品を容易に入手することができる。このことが豊かさの象徴である。そして途上国においても、そのような豊かさが目標として設定されている。この豊かさは、人間にとって有用ではない自然資源を加工して有用なものに変化させるという技術によって支えられている。

ところが、このような技術の持つ問題が、最近しばしば話題になる。豊富な工業製品をつくり出すための条件としての資源エネルギーについては、その限界が指摘^{てき}されてすでに久しい。しかも使用し終わった製品の廃棄^{はいき}については、安全問題などを引き起こしながら廃棄場所の重大な不足を招いている。そしてもつと本質的なこととして、資源や廃棄という、いわば工業製品の条件のみならず、製品そのものの使用の場面においてさえも限界を迎^{むか}えているということである。道路の容量に対して過剰^{じやう}な自動車とか、家の中に入り切らない家庭用機器などの問題、しかも道路の新設は少なくとも都会においてはもはや不可能であり、家の広大化は地価の高騰^{かうとう}によってのぞむべくもない。

とすれば、自然資源を有用な人工物に変換^{かん}することによって豊かさを達成するという、あたかも自明と考えてきた問題は、多くの矛盾^{むじゆん}をはらむようになってきたと言わざるを得ない。これらは、人工化した環境^{かんげん}に人工物をつめこむことの限界であり、資源・エネルギーの限界であり、廃棄物^{はいきぶつ}処理能力の限界である。そしてこの限界は、局所的現象にとどまらずに、オゾン層破壊^{かい}に見られるように地球規模にまで拡大している。

依然^いとして工業製品の大量供給という図式に頼^たりながら、一方で私たちは②別の視点を生み出しつつある。それは、工業製品を使用するのは、それが持つ機能を※享受^{きやうじゆう}することが本当の目的であり、製品を所有することはそのための単なる手段にすぎないという視点である。

考えてみれば、豊富な製品を所有しそれに囲まれて暮らすというのは、それ自体は目的ではなく、それらの豊富な機能を享受するのが目的であるのは当たり前のことであり、その所有とは、本来の機能享受の目的達成を可能にする手段に過ぎない。とすれば、技術による豊かな社会の実現という視点においては、このような製品所有は必然的なものではない。むしろ機能の売買がより本質的である。

我々が日常生活において、製品を買って所有するかレンタルで機能を買うかの選択は何気なく行うことが多いであろう。しかしこのことは一見その場面場面では偶発的なことのようにありながら、結局は現代技術が持つ問題に本質的に影響を与えていく重要な視点である。

我々の周辺にある多くの工業製品は、その寿命が数年程度というものが圧倒的に多い。乗用車、家電製品などがその代表で、一〇年以上使っていると珍しい目で見られたりする。しかもこれらの製品は、頻繁にモデルチェンジを行って、性能あるいはファッションの観点から古いものを陳腐化^{※ちんぷ}してしまい、結果的に③寿命は機能的寿命の半分以上になつてしま^う。

工業製品の寿命が短いことは日常的なことなので、あまり疑いを持たずに受け入れているが、よく考えてみると④不思議なことである。古代エジプトのピラミッドは、形状や素材、そして構造において、いかに長寿命にするかという点に最大の注意を払^{はら}ってつくられ、現に五〇〇〇年の寿命を保っているわけである。中世の教会建築も同じで、一〇〇〇年以上の寿命がある。機械ですら、産業革命の産物としての蒸気機関車は数十年の寿命があつたのである。このように人間は長い間不変ということに憧^{あこが}れていたのだ。ところが我々の自動車は五年であり、ファッションを気にすればせいぜい二年である。人類の歴史の中で、初期の工業製品としてのピラミッドから現代の自動車まで、数千年の間で、製品寿命を数千分の一に短縮してしまったというのは驚^{おどろ}くべきことである。

永遠性の夢を捨ててまで人類がほしかったものは、現代技術の特徴づける機能性ということであろう。現代の技術的製品は、さまざまな機能を持っており、それが前述のように人々の生活を豊かにするのであって、これらは総称して利便性と呼べるであろう。多様な利便性を提供するためには、製品の短寿命は有効というより必要不可欠だったのかもしれない。現在見られる多くの製品におけるモデルチェンジによる製品代謝は、少なくとも名目上利便性の向上をうたっており、したがって、もしこれらの製品を五〇〇〇年も使われたら、向上は五〇〇〇年間期待できなくなってしまう。とすれば、^⑤短寿命は現代技術の本質的な特徴である。

しかしながら、この点についても本質的な疑問が提起されつつあると言つてよいであろう。それは前述した地球環境の限界の問題と無関係ではない。^Aそれらと共鳴して起こってくる問題である。^B、短寿命は結局^⑥短いサイクルで次々とつくり、次々と捨てることにほかならず、資源やエネルギーそして廃棄問題に大きな影響をもたらすものだからである。

^C短寿命化の持つ本質的な問題が、人工環境の不安定化としてあらわれてくる。短寿命というのは、前述のような製品代謝の高速化の結果として生じてきたものであるが、技術的にはなるべく少ない素材で最大能力を発揮する極限設計の方法を生み出した。同時に最少資源で高信頼性を得る方法なども樹立された。^D、結論的に言えば、そもそも現代技術の中心である無機物による人工的製品は、生物を中心とする自然環境に比べて^⑦本質的に不安定である。例えば我々に豊富な食糧を提供してくれる海や山は、人間による濫獲^{らんかく}さえなければ何万年も寿命があると考えてよいであろう。

この人工物にまつわる本質的不安定さと、それを加速した短寿命化とは、社会に大きなメンテナンス負担をもたらすことになる。都市における建造物、さまざまな道路、交通機関や工場、そして個人生活の行われる家とその家具にいたるまで、使用すれば、あるいは放置したままでもすべて劣化^れし、劣化からの回復が自然に、あるいは自発的に行われることはけつしてない。補修、修理、検査、交換などのメンテナンス作業は、その量的増大とともにますます速まる劣化速度^{ゆえ}の故に、人々にとってますます大きな負担となっていく。

(吉川^{よし} 弘之^{ひろゆき}『テクノロジーの行方^{ゆくえ}』より)

注 ※ 享受：受け入れて味わい楽しむこと。

※ 陳腐：古くさいこと。ありふれて平凡な^{ぼん}こと。

※ 代謝：古いものが新しいものに入れかわること。

問一

——線部①「現代技術」とありますが、それはどのような技術ですか。本文中から四十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問二

——線部②「別の視点」とありますが、その視点により変化してきた生活の説明として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 新品の服を買うよりも、なるべく古着屋を利用するようにしている。

イ 自家用車を持たず、目的に応じて必要な時に借りるようにしている。

ウ ゴミの分別をして、資源ゴミはリサイクルできるように心がけている。

エ スーパーに行ってもレジ袋^{レジ}をもらわず、エコバッグを使うようにしている。

オ 暑い夏でも、クーラーより電力消費量の少ない扇風機^{せん}を使うようにしている。

問三 —— 線部③「寿命は機能的寿命の半分以下になってしまふ」とありますが、その理由として最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

- ア 旧型製品を修理して使い続けるより、新型製品に買い換える方が、かえって安くつくと考えるから。
- イ 次々と新しい性能を備えた新製品が出ると、今まで使っていた旧製品は役に立たなくなってしまうから。
- ウ あらゆる面で性能に優れた新しい製品に比べると、実際旧型製品は新製品の半分以下の寿命しかないから。
- エ あまりにも次々とファクション性に優れた新製品が出るため、買うよりもレンタルしようと考えてしまうから。
- オ 新製品が出ると、旧型製品はまだ充分使えるにもかかわらず、魅力^みを失い、使われなくなってしまうから。

問四 —— 線部④「不思議なこと」とありますが、なぜ「不思議」だと言っているのですか。本文中の言葉を使って、四

十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線部⑤「短寿命」とありますが、「短寿命」化するのとは何のためですか。本文中から十五字以内でぬき出して

答えなさい。

問六 A D に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、

同じ記号を二度使うことはできません。

ア しかも イ ところで ウ むしろ エ なぜなら オ しかし

問七 ——— 線部⑥ 「短いサイクルで次々とつくり、次々と捨てること」とありますが、これとほぼ同じ内容を示している表現を、同じ段落の中から十字以内でぬき出しなさい。

問八 ——— 線部⑦ 「本質的に不安定である」とは、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 濫獲^{らんかく}される心配はないが、作りすぎてしまうおそれがあるということ。
イ 今後も安定的に一定量を生産し続けることは非常に困難だということ。
ウ 自然物よりも寿命が短く、自分自身で回復する能力を持たないということ。
エ 自然環境とは違^{ちが}って、我々に多くの利益をもたらしてはくれないということ。
オ 人間によって破壊された自然環境に比べ、人工物は簡単に修復ができるということ。

問九 筆者の主張として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア なるべく少ない素材で最大能力を発揮する極限設計の方法は、自然環境の保全につながる。
- イ 我々に豊富な食糧を提供してくれる自然の寿命を縮めないために、濫獲はするべきではない。
- ウ 最少資源で高性能を得る方法によって、資源問題や廃棄問題を解決することができるようになる。
- エ メンテナンス作業に多くの時間と費用がかかってしまう人工的製品は、これ以上つくるべきではない。
- オ 永続性の夢を捨ててまで人類が求めた人工物の短寿命化は、社会に大きな負担をもたらすことになる。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは、リレーに出場することになった。それも、市内の小学校の陸上クラブの対抗戦。4×100リレーの六年生の部。これって、すごくない？ 君には、どうってことないのかなあ。ぼくにとつては、^①たいした事件なんだけど。だって、ぼくは、もともと、そんなに脚が速いほうではなかった。遅いとまでは言わない。でも、まあ、ふつうだろう。

それなのにリレーのメンバーに選ばれた理由は、実に簡単。ぼくの小学校では、陸上クラブは人気がない。最初から部員が少ない。サッカーなんかとくらべると、なんか地味な感じでしょ。そのうえ、練習がわりと単純である。だから、途中で何人もやめた。夏の大会の時点で、男子の六年生部員は、ぼくをふくめ、なんと四人になっていた。つまり、4×100リレーに出る四人。放課後、特別にリレーの練習が始まった。それまでも、走るの走っていたから、バトン・パスが中心。

先生が、説明してくれた。

バトンを渡すうえで大切なのは、受けとるランナーが十分に加速しておくこと。決められた幅のリレー・ゾーンの中で。それで、渡す役のランナーともらう役のランナーが同じスピードになったところで、バトン・パス。

短距離はスタートの部分で時間がかかる。受けとるランナーが前もって加速できる4×100リレーの記録は、四人の百メートルのタイムの合計よりずっと速くなる。

② そうなんだと思う。理屈ではね。

ぼくは第三走者だった。第二走者の竹田が走ってくる。タイミングをはかって、ぼくが走り出す。すると、すぐにふたりの間がつまり、竹田に押し倒されそうになる。

「おまえなあ、のろのろすんなよ」

竹田は、いらいらしている。

今度は早めにスタートしてみる。そうすると、ぼくは、竹田の足音を聞きながら、ゾーンの線をオーバーしてしまう。振り向くと、竹田は膝に手をあて下を向いていた。

③ 竹田は何も言わない。顔をあげようとしなかったけど、バトンの先がぶるぶるしてるのがわかった。

福岡と合わせるのは、ずっとやさしかった。ぼくが、ハイッ、と言ってバトンを差し出す。すると、そのときには、後ろに目があるかのように、福岡の手がしっかりと伸びている。それは、福岡がうまかったのだ。福岡は、アンカーには慣れていた。ぼくとは違って、ずっと、運動会のスターだったのだから。

走るただけではなく、ぼくはすべてが「ふつう」なんだと思う。なにをやっても福岡みたいにスターになれない。勉強でも、運動でも。そういう子にとっては、④ 小学校生活は、そんなに愉快じゃない。

そう。だから、ぼくは消しゴムを持っていた。ぼくのための特製の消しゴム。何かいやなことがあると、ぼくは、いそいでその消しゴムをかける。

国語の授業なんて、いい例だ。窓の外をながめていると、教科書に何を書いてあるのか、ぼくには、わからなくなってしまう。わからなくなっていると、よく先生に当てられる。雲が流れるのを見ていたんだから、適当な答えを言うしかない。みんなに笑われる。

⑤ ぼくは、ぼくの消しゴムをひとこすりした。

すると、国語の教科書も、先生も、消える。ひとり、ぽつんと立たされているぼくの前から、黒板が消え、クラスの子たちが消え、教室が消えていく。

女子チームもリレーに出場する。毎日の練習の終わりには、男女で、実際に四人通してレースをやった。もちろん、女子に負

けるわけにはいかない。

で、勝敗は、明らかに三走のぼくにかかっていた。

竹田までは、ぼくたち男子チームがリードしている。ぼくの番になって、途中で抜かれる。抜かれるけど離されないようにがんばる。すると、福岡が女子を抜きかえす。それがパターン。

あまり、楽しいパターンではない。

リレーの練習をしてみると、変なことが起こってきた。

女子でいちばん速いのは、第一走者の児島さんだった。うちの学校の六年生の男を全部集めても、児島さんに勝てるやつは、そんなにいないと思う。女の子たちの間では、コジって呼ばれてる、児島さん。

変なのは、その児島さんではなくてぼくのほうで、ぼくは、いつのまにか児島さんを見ている自分に、気がつくようになった。

児島さんが、スターティング・ブロックをセットする。足の幅をいねいに調整している。

「位置について」の合図。ラインの手前に両手をつく児島さん。「用意」で、児島さんが腰を上げる。クラウチング・スタートの姿勢は、猫みたい。児島さんの真剣な顔つき。額に汗が光っているのがわかる。

⑥ ぼくは、なんだか恥ずかしくなつて、むりやり目をそらす。

竹田とぼくのバトン・パスは、だんだんまともになってきた。何回かに一回は、呼吸がみごとに合う。そうすると竹田は喜んで、バトンでぼくの頭をパカパカたたいた。

そんなふうにして放課後の陸上クラブの練習が終わると、ぼくは竹田ではなく福岡と一緒に帰っていた。第二走者より第四走者のほうがやさしいっていうせいではない。もともと、家が近いから。それが、いつのまにか、そこに児島さんが加わるようになった。たしかに児島さんも、方向が同じといえば同じだった。

福岡と児島さんが、話をしていた。ぼくは、ふたりがしゃべるのを聞いていた。

⑦ 国語の時間みたいになつてしまう。

国語の時間みたいに、雲を見ていたわけではなかったのだけれど。

いよいよ大会になつた。

予選のレース。ここで二位までにはいつておかないと、決勝に進めない。先生の予想では、なんとかいけそうだっていうんだけど。ぼくは三走だから、バック・スタンドの前でバトンを受ける。はるかかなた、トラックの対角線上でレースが始まる。第一走者たちの腰がきれいにそろつて上がった。ピストル。一発でスタート。いちばん後ろで大きくおくれてる選手はいるけれど、前のほうはあまり差がひらかない。

一走から二走へ。竹田がバックの直線に来る。たぶん二位。ぼくは、腰を落とし、タイミングをはかる。よし。一、二、三。前を向いたまま、ぼくは後ろに手を伸ばす。ぼくの手には、バトンがたたきつけられる。痛いくらいだ。

呼吸は合つた。

ぼくは、走る。いつもは長く感じられる百メートルは、あつという間だ。

⑧ ぼくのレーンの先では福岡がぼくに向かつて大きく腕を回していた。三位。いや、四位になつてゐるのかも。

第四コーナーの外には、応援の生徒たちがいた。何か叫んだり、手をたたいたりしている、小学生のかたまり。

ぼくの目に児島さんの姿が飛びこんできた。そのとき、^⑨突然、なんだか黒いものがわいてきた。黒くて重い何かが、ぼくの心の中に広がっていく。

ぼくは、思い出してしまった。さつき、スタンドで、福岡がコジーと言っていたことを。コジー、と児島さんに話しかける福

岡。それに対して、笑って答える児島さん。福岡が児島さんをそう呼ぶのを、ぼくは、初めて聞いた。

内側のレーンのやつが出てきたのに、ぼくは気づく。並ばれてしまう。あと少しでバトン・パスなのに。ぼくのせいで、リレーは予選落ちになってしまいそう。

消しゴム。ぼくの、あの消しゴム。ぼくが消しゴムをかければ、消えていく。隣のレーンのやつも、応援の生徒たちも。消しゴムにこすられて、児島さんが消え、陸上競技場が消える。

福岡が、叫ぶのが聞こえた。フアイト、と言ったのだ。ぼくは、けんめいにスパートする。ぼくのからだは、ぼくを走らせる。

リレー・ゾーンにはいる。福岡が走り出す。でも、いつものタイミングより、少し早い。福岡の背中が、遠くに感じられる。福岡は、スピードをゆるめようとしない。バトンをパスできないまま、振り切られてしまいそうだ。リレー・ゾーンの線が目にはいる。チャンスは、いましかない。ハイッ、と叫んで、ぼくは思いっ切り飛びこんだ。福岡が後ろに手を伸ばした。からだをひねり、右手をまっすぐに伸ばす。バトンを、福岡の手をめがけ、倒れこむようにして突き出す。

なんとか、届きますように。

ぼくは、勢いあまって、ころんでしまった。顔をあげると、ゾーンが終わるラインのぎりぎりのところだった。

ぼくは、トラックにはいつくばったまま、ゴールに向かうアンカーたちの背中を見ていた。

「ごめん、失敗した。スタートが早すぎた。きっと、あせってたんだと思う」

ゴールにみんなが集まったとき、福岡は真剣にあやまった。

ぼくの膝はすりむけて血が出ていた。肘もひりひりする。

福岡は速かった。二着。

決勝進出だ。

「よく落とさなかったわね。先っぽしか、つかめなかったでしょ。やっぱり、福岡君、うまい。結果としては、最高のバトン・パスよ」

児島さんが、興奮している。

傷の手当てをするようにって、役員のひとに言われた。トラックのわきのテントを教えてもらった。

歩きながら、ぼくは考えた。

⑩ あのと、ぼくが消したかったのは、児島さんでも陸上競技場でもない。いつも福岡と児島さんの隣でだまっている、ちっぽけな自分の姿だったのだろうと。

(川島 誠^{まこと}『バトン・パス』より)

問一——線部①「たいした事件」とありますが、なぜ「たいした事件」のですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問二——線部②「そうなんだと思う。理屈ではね」とありますが、「そうなんだと思う」の後に「理屈ではね」と付け加える「ぼく」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　すべてを理屈で説明しようとする先生のこと気が入らないと思っている。

イ　理屈で考えたことがすべてのことに当てはまるわけではないと思っている。

ウ　理屈で考えると自分の脚が遅すぎるから迷惑めいわくをかけているのではと心配している。

エ　リレーではバトン・パスの練習が最も効果的だという理屈に疑問を抱いだいている。

オ　理屈のとおりやつても自分の脚が速くならないことを自分のせいだと思っている。

問三——線部③「竹田は何も言わない。顔をあげようとしなかったけど、バトンの先がぶるぶるしてるのがわかった」とありますが、この時の「竹田」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　うまくいかないバトン・パスの練習に意味を見いだせず、もうやめてしまおうと思っている。

イ　ぼくとのバトン・パスが何度やつてみても思いどおりにいかないことに腹をたてている。

ウ　絶対にリレーに勝たなければならないという思いから、今の練習では足りないと思っている。

エ ぼくとバトン・パスの練習をしてもどうしてもうまくいかないので、半ばあきらめている。
オ 本当はリレーになんて出たくないのに無理やりに練習させられることに反発を覚えている。

問四 —— 線部④「小学校生活は、そんなに愉快じゃない」とありますが、なぜ「ぼく」にとって、「そんなに愉快じゃない」のですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問五 —— 線部⑤「ぼくは、ぼくの消しゴムをひとこすりした」とありますが、この時の「ぼく」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 授業中に突然先生に当てられたので、動揺^{よう}をかくすため、消しゴムで消す動作をしている。
イ 消しゴムで消すように自分を周囲から消し去ることで、自分の存在をかくし、自分を守っている。
ウ 自分の周囲の存在を消し去ることで、自分がいやな思いをしたことを忘れ去ろうとしている。
エ 自分の気分をすぐに変えられる消しゴムを持っていることで、周囲より自分が優^{すぐ}れていると感じている。
オ 自分の本当の気持ちをわかってくれない周囲の人々に怒^{いか}りを感じて、周囲を消し去っている。

問六 ——線部⑥「ぼくは、なんだか恥ずかしくなって、むりやり目をそらす」とありますが、その理由を説明したものとして

最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 女子のくせに走るのが速い児島さんを生意気に思っている自分を意識し、そんなことを思ってはいけないと思ったから。
- イ 女子でいちばん走るのが速い児島さんを尊敬している自分に気づいたが、女子に負けるわけにはいかないと思ったから。
- ウ 児島さんと比べて自分の脚があまりにも遅いことに気づき、とても情けない気持ちになって悲しくなってきたから。
- エ 児島さんの動作を見ていて児島さんに心がひかれていることに気づいたが、そんな感情をふりはらおうとしたから。
- オ 猫のようになっていく児島さんのかっこうを見て笑いそうになったが、真剣な児島さんを笑っては失礼だと思ったから。

問七 ——線部⑦「国語の時間みたいになってしまう」とありますが、ここでの「ぼく」の状態の説明として最も適当なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 福岡と児島さんがしゃべっていることが理解できず、混乱した気分になっている。
- イ 福岡と児島さんがしゃべっていることに反感を抱き、適当な返事をしてやろうと思っている。
- ウ 福岡と児島さんがしゃべるのを聞きながら、ぼんやりと取り残されたような気持ちになっている。
- エ 福岡と児島さんがしゃべっているのを聞いてうれしくなり、自分も仲間に入れてほしいと思っている。
- オ 福岡と児島さんがしゃべるのを聞いていると、退屈でたまらなくなり、うんざりしている。

問八——線部⑧「ぼくのレーンの先では福岡がぼくに向かって大きく腕を回していた。三位。いや、四位になっているのかも」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア がんばって速く走ることができているという満足。

イ 福岡が応援してくれていることに対する喜び。

ウ 福岡にはがんばってもらおうという期待。

エ 自分はおくれをとっているのではないかという不安。

オ 人ごとのように余裕を見せる福岡に対する怒り。

問九——線部⑨「突然、なんだか黒いものがわいてきた。黒くて重い何かが、ぼくの心の中に広がっていく」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他の生徒が児島さんばかり応援してぼくに注目してくれないことに対して、ひがむ気持ち。

イ 児島さんの姿を見て、今度こそ児島さんにいいところを見せようと、はりきる気持ち。

ウ 児島さんがぼくの走りについて、福岡と比較してさげすむのではないかと、恐れる気持ち。

エ 何度リレーをしてみてもぼくより速く走ることができる福岡に対して、うらやむ気持ち。

オ ぼくが思いを寄せている児島さんと福岡が仲良くしていることに対して、嫉妬する気持ち。

問十——線部⑩「あのとき、ぼくが消したかったのは、……ちつぽけな自分の姿だったのだろうと」とありますが、この時「ぼく」はどういうことに気づいたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ぼくはいつもいやなことがあるたびに「消しゴム」で消してきたが、それは実は傷つくことから逃げる自分を見たくなくなかったのだということ。

イ ぼくは何かがあるたびに自分の「消しゴム」でいろいろなものを消してきたが、実は人間関係のわずらわしさを消してきたのだということ。

ウ ぼくはいつも目立たない存在であつたけれど、今回のリレーを通して、本当は目立ちたかつた自分を「消しゴム」で消してきたのだということ。

エ ぼくは脚の速い児島さんにあこがれてきたけれど、本当はそうしたあこがれの気持ちを「消しゴム」で消し去りたかつたのだということ。

オ 国語の時間にみんなに笑われても言い返す勇気が出ず、陸上競技でもうまくいかなない自分の情けなさを「消しゴム」で消したかつたのだということ。

⑤	①
⑥	②
⑦	③
⑧	④

(う)

問二	①		意味
	②		意味
	③		意味

③	②	①
---	---	---

問二	問一
問三	S

[illegible][illegible]

問六	A
	B
	C
	D

問七

問九

問
一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

E

⑤	①
⑥	②
⑦	③
⑧	④
(う)	

問 二	
①	
②	
③	

③	②	①
---	---	---

問二

問三

問一

問四

[illegible][illegible]

A
B
C
D

[illegible]

問九

問 一

問二

問三

問 四

問五 問六 問七

問八

問九

問十

問 次の文章を読んで、考えたことを六〇〇字以内で述べなさい。

きみたちは将来、自分はこんな人間になりたい、こんな仕事についてみたい、という夢をもっていますか？ あるいは自分がなりたいたいものに向かって、地道な努力をかさねているかもしれないね。

たとえば、漫画家をめざして、勉強そっちのけでコツコツと漫画をかきためていたり、サッカー選手を夢見てサッカー部に入り、毎日泥だらけになって練習したり、あるいは海外留学を目標にして、人一倍、英語の勉強に力を入れていたり……。その一方では、漠然とした将来の夢や希望はあるけれど、「どうしたら、その夢が実現できるかわからない」という人もいれば、自分が何になりたいのかわからず、もたもたしている人だっているでしょう。いや、もしかしたらきみたちのなかには「将来の目標など考えたこともない」という人の方が多いのかもしれない。

実際、「いのちの授業」をして全国を回っている私は、小学校の子どもたちに「将来は何になりたいの？」とよく質問するのですが、「わからない」と首を横に振る子が意外と多いのです。この傾向は大学生にもよく見られます。私が働いている聖路加国際病院には毎年、医学生たちが実習にやってきます。私は毎回、医師の卵である彼らにこうたずねます。

「将来、どんな医者になりたいの？」

すると彼らは「内科医です」「外科をやりたいんです」とは答えるのですが、かさねて私が、「では、どの病院の、どの先生のような医師になりたいと思っているの？」ときくと、きまって困ったような顔をして口ごもってしまします。どうやら漠然と医師になりたいと思っではいても、誰そのような医師をめざしたいとか、医師としてどんな生き方をしたいのかについては、考えたこともないらしい。つまり、彼らは「ぜひ、あの先生のような医師になりたい」という理想のモデル像がみあたらないまま、なんとなく医師という職業にこうとしているのです。

では私の少年時代はどうだったのでしょうか？

実は私も小学校四年生までは、自分が何になりたいのかなどと考えたこともなく、「将来はお医者さんになろうかな」という気持ちがわいてきたのは、五年生も終わりごろでした。そのころ、わたしはある医師に出会い、強い印象が残っていたからです。

小学校四年生の時、私は急性腎炎というやつかいな病気にかかりました。そのとき、私を診てくださったのが安永先生という小児科の先生でした。

先生は、体に変調をきたし不安でいっぱいになっている十歳の私を「必ず治るから心配しないで」と言葉少なく、しかし、力強く勇気づけてくださったのです。先生から「動くと体に悪いから」と言われ、一日中床に横になったままの生活がつづき、ようやく、体を起こせるようになってからも、外出は固く禁じられました。おかげで家の中から一歩も外に出られない生活が三か月もつづき、外で遊び回るのが大好きだった私にとっては、まるで拷問のような毎日でした。そんなときも、安永先生は往診にこられるたびに、友だちと遊ぶこともできない私をやさしく慰めてくださいました。安永先生の適切な治療のおかげで、私は元氣を取り戻し、学校に通い始めました。そうした体験が強烈に残っていたので、私は「できることなら安永先生のようなお医者さんになりたい」とごく自然に思うようになったのです。

もしきみたちが「将来、自分がどんな人間になりたいのかわからない」と思っているのなら、「できることなら、自分はこの人になりたい」という手本になるモデルを見つけてほしいと思います。私がきみたちにモデルを見つけることの必要性を説くのは、理由があります。

それは、人間が「自分一人だけの考えで生きていく」ことはとてもたいへんだからです。こうなりたい、と思える人のまねをする、つまり、モデルがいると、多くのことを学べます。でも、まるごとのまねでは、自分自身がなくなってしまうが……。目的の見えない人生というのは、真っ暗な闇の中を手さぐりで進んでいくのに似ています。しかし、自分がめざすモデルがいれば、人はそのモデルを目標にして前に進むことができるのです。

（日野原 重明『道は必ずどこかに続く』より）

*一行目から書き始めなさい。題、名前を書く必要はありません。

受験番号

--

